
兄と妹えぶりでい

七色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄と妹えぶりでい

【Nコード】

N3731D

【作者名】

七色

【あらすじ】

兄と妹の連載ヴァージョン。無論グダグダ。ただ兄と妹の歪な毎日を送り続けてまいります。更新はマチマチご了承頂きたい。

目玉焼き（前書き）

兄―職業：学生　クラス：3 - 1
妹―職業：NEET　クラス：魔王

目玉焼き

「兄よ。その醤油をとれ」

「何故に命令口調なのだ。ホレ」

「そう言いつつもしつかり渡す兄は将来嫁の尻に敷かれる」

「妹よ。貴様は礼の一つも言えんのか」

「有難う」
ちつちえなあ

「何故だ？今礼を言われたのではなかったのか？
なぜか罵倒された気分になっているのは、妹の浮かべている冷笑の
せいかな？」

「それより兄よ。私は目玉焼きを半生にしろと言ったはずだが」

「普通に兄の質問を流すとは。どんどん遅しくなって。
兄としては威厳を保つため一度しばきたくなくなってきたのだが。
そして卵は眼を離したら堅くなっていた。焦げただけ僥倖だろ」

「ふざけてくれるなよ。」

卵の究極系は外側ふつくら内側トロトロにあるのだ。
こんな中途半端な物体を私に食えと？この私に？」

「本当お前偉そうだな」

「実際偉いから。テヘ」

「妹。お前みたいなのがテへって言っても可愛くないから」

「ふん、貴様に可愛いなど思ってもらわなくても結構。それに私はどちらかというと美人系だ」

「お前のその絶対的自信はどこから出てくるんだ？」

「無論、私から」

「一度我が家の教育方針をあの両親どもに問い詰めたくなってきた」

「そうか」

「普通に流されるとは。割と悲しいな」

「そうか」

「・・・・・・・・」

「そうか」

「何も言っていないだろうが」

「貴様の心が構ってと喚いていたぞ」

「・・・・・・・・」

「図星か」

「喧しいわ。ただ心に木枯らしが吹いただけだ。別に妹に構って欲しいなどと思っておらんわ」

「ほう……」

「……クツ……少し思いました」

「正直とは美德だな」

「その生暖かい微笑みをやめてくれないか？
それにお前の微笑みは何か気持ち悪い。悪いものでも食ったか？」

「強いて言うなら貴様の作った目玉焼きを食った」

「そんなに固焼きが気に入らないか」

「気に入らん」

「妹よ。じゃあ明日からお前自分で作るか？」

「ほお、キッチンを核被災地にして欲しいと言うのか。
全く私の兄はユーモラスで困る。頭おかしいんじゃないのか？」

「自分の料理下手をよくもまあそこまで誇らしげに語れるな」

「料理下手も最近では一つの要素だ」

「何の？」

「ヒロインの」

「誰がヒロイン？」

「私」

「頭沸いたか？病院いくか？妹よ」

「・・・何となく否定されるは想定内だが、
そこまで卑下してくれるとは命が惜しくないのか？兄よ」

「やめろ。日本刀はやめておけ」

「何故だ」

「二度ネタだ」

「・・・」

「・・・」

「まあ、いい」

「うおい」

目玉焼き（後書き）

連載にできるのかは疑問なところ。
でもまあやってみる。

ハルバード

「兄よ」

「何だ妹・・・って寝起きにハルバードは少々刺激が強いな」

「兄が日本刀はダメだというのでな。
わざわざ徹夜して作ったのだ」

「・・・お前そこまでアホだったのだな」

「アホとは言ってくれるな。」

たまには貴様の進言も聞き入れてやるかと思つて作ったのに」

「何故そうどうでもいい事を聞き入れる？
むしろ兄としては学校に行つて欲しいのだが」

「馬鹿め。そうなれば自宅の警護は誰がするのだ」

「お前こそ馬鹿め。去年の暮れに誰が悪戯にこの家のセキュリティを
ホワイトハウス並みに強化したかもう忘れたというのか？」

「・・・チッ」

「照れ隠しに武器を振り下ろすのやめろ。死ぬ」

「・・・死ねば良いのに」

「その聞こえて欲しいのか聞こえて欲しくないか絶妙の音量やめろ。」

なぜか心に深く突き刺さるモノがあるぞ」

「痛みもいずれ快樂になるらしいぞ」

「兄に変態になれというのか」

「すでにシスコンという変態ではないか」

「誰がシスコンか」

「……フツ」

「妹よ。前々から聞きたかったのだが、その嗤い方誰に教わった」

「母から」

「やはり一度わが両親とは拳を交えた話し合いが必要だな」

「時に兄よ」

「なんだ」

「朝飯はまだだろうか」

「……まさかそのために起こしに来たのか？」

「当たり前だろう。料理を作る以外兄にどんな存在理由がある」

「そのさも真面目に当たり前前だと思っている横っ面を引っ叩きたくなる」

「100倍返しに1秒10割の利子をつけてなら了承しよう」

「軽く一千倍以上の仕返しを覚悟しろと」

「とういつか早く朝飯を作れ」

「・・・昨日のカレーがあるだろうに暖めて勝手に食べ」

「ほお、この家でガス爆発の実験しろと。
なかなかサイエンティな冗談だな。死んだらどうだ兄よ」

「似たような言い回しを聞いた事があるな。
妹よ。お前は以外とボキャブラリーが少ない」

「突っ込むところはそこなのか？
兄よ。貴様常識人を気取っているが大概おかしいぞ」

「・・・・・・・・」

「反論しないところを見ると自覚があつたか」

「ああ、うすうすは気づいていた。
こんな妹を育てた親から常識を学べたとは思えんからな。
それでも俺は良くやっている」

「さり気なく私を乏しめるあたり性格の歪みがでるぞ」

「何故朝からしか妹に性格のダメだしを受けねばなんのか。
とりあえずあの親どもは地獄を巡礼していただく必要があることが分

かった」

「どうでもいいが飯はまだか」

「だからカレーを食べえ」

「ガスコンロの使い方が分かん」

「……お前は原始人か？」

「馬鹿を言う。原始人に家屋のセキュリティ強化ができるとでも？」

「何故お前は変にハイスペックで日常的な部分でゴミ虫並なのだ？」

「知るか飯」

「どんだけ腹減ってるんだお前」

「徹夜で金槌を振るっていたら腹が減ったのだ」

「やはりお前はアホだ」

「うるさい」

「だからハルバードを振り下ろすな」

「たまには当たれ」

「というか毎回毎回このオチで行くつもりなのか？」

「・・・・・・ダメか？」

「限界はすでに目前か」

猫

「兄よ」

「なんだ。兄は今バイトを終えて疲れている。飯はコンビニ弁当を買ってあるからソレを食え」

「その弁当ならすでに食べた。足りないがな。それはともかく四の五の言わず、まずコレを見ろ」

「青森のりんごがどうした」

「誰がダンボールを見るといった。中身を見る中身を」

「………猫？」

「猫だ」

「猫だつてお前、コレ何処で拾ってきた」

「家の前に置いてあった。ラッピングされて」

「ラッピングとはまた。ダンボールをラッピングつてお前。世の中には妹みたいなセンスをした奴らが居るものなのだな。急に社会にでるのが怖くなってきた」

「それはどついう意味だ？」

「そついう意味だ。恐らくお前の解釈であっている」

「猫アタック」

「うおい。猫を投げるな。猫を。
生き物で遊んではいけないと習わなかったのか貴様」

「ダンボールアタック」

「猫ガード」

「おい兄よ」

「なんだ妹」

「私が言うのもなんだが自分の台詞を振り返れ」

「咄嗟にやってしまったのだ。事故だ事故。俺に罪はない」

「どう考えても猫ガードといっているではないか。
故意だ故意。罰が悪いからといって苦しい言い訳をするな。
そうやって言い訳を積み重ねて人間は汚くなっていくのだぞ」

「妹に説教されてしまったぞ猫よ」

「ニャー」

「苦しくなったからといって猫に逃げるな」

「むう・・・スマン、猫」

「ミャー」

「時に兄よ。その猫飼ってもいいな？」

「相変わらず人に物を頼む態度じゃないな。

いいなつてすでに確信済みの上にずいぶんと高圧的だな」

「何、今更飼わないといわれても大量に仕入れた猫缶の処理に困る」

「………なんだと？」

「アレを見よ」

「………」

「どうだ」

「いくら注ぎ込んだ？」

「兄の5か月分のお小遣い」

「………貴様、まさか俺の豚さん貯金箱を割ったな？」

「ああ、兄が持つには可愛すぎて前々から不快だと思っていたのだ。
撤去する丁度良い機会だし猫缶も買えてオールハッピーだ」

「豚さんの仇。猫アタック」

「きゃあ」

「・・・・・・・・え？きゃあ？」

「・・・・・・・・クツ」

「妹よ。今の悲鳴はまさか貴様か？貴様なのか？
そんなはずないよな？そんなわけないよな？
まさか貴様のような性別不詳の暴君がきゃあはないよな？」

「クツ・・・・・・・・猫缶アタック」

「待て待て。分かった今のは聞かなかった事にしてやる。
だから猫缶を投げつけるのをやめろ。」

猫缶だって何だって時速120kmオーバーで投げたら凶器だぞ」

「ニャー」

猫（後書き）

なんか最後の猫の鳴き声を入れたくなった。
ちなみに当方猫信者。

生物のほとんどは猫で代用がきくと信じて疑いません。

V S トイレ

「妹―」

「どうした兄よ。トイレに籠ってそんな情けない声を出して」

「トイレットペーパーがない。取ってきてくれ」

「却下だ」

「なぜだ」

「苦しめ」

「貴様それでも血の通った人間か」

「しからば手で拭けばよかろう」

「それは人間としての尊厳にかかわるだろうが」

「兄にそんなモノがまだあったのだな。初耳だ」

「お前にとって俺とは何なんだ？」

「・・・目玉焼き製造機といったところか。
しかし最近はその役目も危うくなってきたがな。
そろそろ廃棄処分するべきなのだろうか？」

「妹よ。おれがこんな現状だと思って舐めているな」

「フン。強がったところで無駄だぞ兄よ。
今貴様の（人間としての）生死は私が握っているのだ」

「……おれにどうしろと？」

「なかなか殊勝な態度じゃないか。そうだな、死んでくれ」

「意味ないだろうが」

「なぜだ。人としては死ねるぞ」

「……いや、やっぱ意味ないな」

「悩んだな？」

「喧しい。さつさと紙を持ってこい。晩飯がなくなるぞ」

「カップ麺がある」

「お前、お湯も沸かせないだろうが」

「フフフ、私がいつまでもそのままだと思うなよ。」

「最近になって電子レンジくらいの扱いはマスターしたわ」

「大分遅いかな」

「五月蠅い。それでも最早私に死角はない」

「カップ麺の栄養バランスの悪さを知らんのか。」

アレひとつで一日の成人男性の塩分摂取量を満たすのだぞ。
そんなもん食ってたらお前、運動もしないで太るぞ？」

「私にとって容姿など二の次だ。どうせ外には出ない」

「いろいろとダメなセリフだな妹よ」

「人間が終わるか終わらないかの瀬戸際の兄には言われたくないがな」

「しかたない。頼むからトイレットペーパーをくれ」

「……仕方ない。ならばこれで拭け」

「紙やすりとはベタな……」

「しかしその威力は過去の史実に基づき実証済みだ」

「こんなんで拭けるか」

「……ならばコレでどうだ」

「イチジク浣腸って……最早拭けないぞ。
拭く拭かないじゃなくて拭けないんだが」

「先端でこそぎ落すように」

「生々しいわ」

「……それではとっておきだ」

「・・・・・・・・妹よ」

「なんだ」

「猫だぞ」

「そうだな」

「拭けるかボケ」

「流石にそれは私としても冗談だ」

「前の二つはまじめだったのか・・・」

「・・・・・・・・ならばこれで」

「いや、もういい。猫、紙取ってきてくれ」

「馬鹿か兄よ。猫がそんなことできるわけがなか・・・」

「ニャー」

「・・・・・・・・持ってきたぞ妹よ」

「・・・・・・・・持ってきたな兄よ」

「・・・・・・・・テレビ出れるんじゃないか？」

「・・・・・・・・人前は好かん」

「一ヤ一」

V Sトイレ（後書き）

どうでもいい話、猫が戸を閉めたら化け猫らしいですよ。
トイレットパーパー持ってきたら何なんでしょうね。

らぶれたあ？

「兄よ。私宛にラブレターが届いたのだが」

「馬鹿を言っな。お前に出す物好き・・・」

否、怖いもの知らずがこの世間の何処に居ようか」

「兄よ」

「何だ妹」

「^{ひが}僻むな」

「・・・僻んでない」

「兄よ。何故そこまで分かり易いのに誤魔化そうとする。全然誤魔化せてないぞ。まさか自覚がないのか？」

「喧しいわ。というか貴様は齒に衣着せるという事を知らんのか」

「ああ、自覚はあったのか。私は安心したぞ兄よ。

実に残念ながら戸籍上はどうしても貴様は私の兄なのだ。

大変ムカつくのだがお前が私の兄であることは事実なのだ。

その兄がまさか最近流行りの鈍感主人公キャラでなくて私はホッとした。

ああいったキャラは鈍感を補う天然のステータスがあつてこそだ。意識も出来ない無意識もできないでは兄はまるで蛆虫だからな」

「どうもお前の主観に偏ったモノを感じるのだが」

「馬鹿な。今時コレくらいは普通だろうに。」

まあ、兄は前時代の遺物だからそう感じるのだろうよ」

「失敬な。そこまで流行に疎くないわ」

「愚かな。ならば最近の流行語を言ってみろ」

「・・・・」

「ふん、見るがいい。鏡で己の間抜け面を見るがいい」

「ええい。喧しいわ。ならばお前こそ鏡で自分の目を見るがいい」

「おお、まるで黒水晶の様に澄んでいるな」

「妹よ。眼科行くか？」

お前はドブ川の水と水晶の見分けがつかないのか？」

「それは暗に私の目が濁りまくっていると取っていいのか？」

OKだブラザー。今生に残す言葉はあるか？その首今日こそ落としてやる」

「一日中パソコンでMMOをやり漁っている貴様の目が綺麗だと？
少なくとも充血して血走ってる眼を綺麗と称する人間を見たことはない。」

そしてまた刃物か。そして次は西洋刀か。またか？また作ったのか？」

「ああ、通販で安く売っていた」

「何処だ。何処の通販会社だ。どう見ても違法だろうが」

「安心するがい兄よ。刃の漬したレプリカを私が研いただけだ」

「何だ？それは何に安心すればいいんだ？」

「ん？刃が鈍らじゃないかと不安がっていたのではないのか？」

「は？何故俺が刃の切れ味に不安を覚えねばならぬ」

「何故つて一撃でスッパリ逝った方が痛くないぞ？」

「……俺は今兄弟間に凄まじい認識の食い違いと溝を感じた」

「……時に兄よ。話は戻ってこのラブレターなのだが、手紙と一緒に中に妙な白い粉がパック詰めされている小包が届いたのだが」

「また強引な話題展開の仕方だがそれは捨てて来い。それラブレター違う。絶対違う」

「馬鹿な。手紙にはDearと有ったぞ。

実も知らぬ人間に『親愛なる』だぞ。ラブレターだろ」

「言語文化の違いと常識を知れ。そして頼むから早く捨てて来い」

らぶれたあ？（後書き）

何か変なネタが混じっちゃいましたな！。

やはり宿題をしないとという重圧を負いながら書くのはよくなかったですねー。精神状態が爆裂寸前。

キッチンブレイク（前書き）

本日珍しく兄攻勢

キッチンブレイク

「妹よ」

「・・・・・・・・」

「妹よ」

「・・・・・・・・」

「妹よ」

「・・・・・・・・五月蠅い。仕方なかったのだ」

「何故なのだ？お前は一体どういうアクロバティックな調理法を行った？」

何故フライパンがねじ切れた上にお玉と融合しているのだ？」

「・・・・・・・・仕方ないのだ」

「仕方ないわけないだろうが。これはアルミ等とは違うのだぞ？鉄製だ鉄製。アルミならまだ望みが・・・・・・・・ないか。」

ともかくどう考えたらねじ切れるのか是非ともご解説願おう」

「半重力装置が暴走した・・・・・・・・。」

一定空間における重力があらぬ方向に拡散、収束してしまったのだ。重力などは反発しあっているからこそこの程度の重みしか感じないが、ある一定方向に向かうと約1トンの力を持つことができるのだ。つまりフライパンの中心を基点とした重力が各方向に収束、拡散し

た際に、
集まってしまった力がフライパンの強度を凌駕したのではないかと
思う」

「突っ込みどころが多すぎて参るのだが」

「何故だ」

「まず常識から教えなければいけないのかと頭が痛い
が、取り合えず何故反重力装置なんて代物がうちに置いてあるのだ」

「作った。空を飛ぶのは人類のロマンだ」

「何故飛行機を使わない」

「風を感じたいのだ」

「暴走族にでも入って来い」

「空を飛びながら風を感じたいのだ」

「崖から飛び降りろ」

「兄よ。今日は妙に辛口だな。何か嫌なことでもあったか？」

「強いていうなら妹がキッチンで化学実験を行った事があるが？」

「仕方なかったと言っているだろう。
ガスコンロが点かなかったのだ」

「何故着火という原始人でも出来ることに反重力装置なんてもの持ち出した」

「うむ、コレはな起動時に莫大な量のエネルギーを必要とする。そのエネルギーの生成する時にかなりの熱量を放出するのだ。だからそれでフライパンを熱してだな」

「ちなみにその熱量は」

「約6000度」

「太陽の表面並みの熱でなにがしたいのだ。地球上でそのレベルの熱量を使う料理は存在しない」

「馬鹿な」

「何故真面目に驚く。お前こそ馬鹿な」

「私は人類の文明レベルの低さに愕然とした。そして兄の台所一つで切れる底の浅さに驚愕した」

「台所を崩壊させて切れない主婦を探して来い。妹よ。貴様反省していないようだな？」

「諦めろ。さだめ運命だ」

「お前、今年お小遣いなし。今週晩飯抜き。カップ麺は処分」

「貴様悪魔か」

「ならばお前は破壊神か」

「どちらかというと聖母だ」

「寝言は寝て言え。それとも俺が寝かしつけてやろうか？
無論次の朝を迎えさせてやる自信はないし保障もせんがな」

「……猫、撤退だ。今日の兄はマジギレしている」

「待て、せめてこの惨状をどうかしていけ」

「……撤退だ」

「……晩飯抜き2週間だな」

キッチンブレイク（後書き）

妹のスペックがどんどん上がっていく・・・。

このままではいかん・・・。

もともとコレには生活観と現実感を混ぜるのがコンセプトだったはずだ。

落ち着くんだ俺。素数でも数えてろ。

よし、今度は自重しよう。

でも、今回はネタが詰まったので・・・勘弁だなあ・・・。

可燃不燃

「可燃ゴミと不燃ゴミってなにが違うのだ」

「妹よ。藪から棒なのはいつもだが、今日はどうした」

「兄よ。可燃と不燃の違いとは何だ」

「だから意味が分からない」

「蛆虫が。蝸牛の如き愚鈍な生き物が」

「何故そこまでボロ糞に言われる謂れがあるのか、是非とも全国の常識人の皆様に問いかけたいな」

「その前に私の問いに答えるべきだぞ」

「可燃と不燃の違いとやらか？」

「ああ」

「読んで字のごとくだろ」

「いや、それは真実ではない。

何せ不燃ゴミとて高熱で熱せれば燃える。
にも関わらず不燃とは何事か」

「燃やすべきじゃないのだろうよ」

「何故だ。ダイオキシンとて超高熱ならば発生しないらしいぞ」

「コストが掛かるだろうが」

「ふん。所詮世の中金か。金金金。

ソレが故の怠惰ならば社会で容認されるというのか。

燃えるにも関わらず不燃とは舐めきっているにも程があるだろう。

『不燃』とは『燃え不^{もえず}』という意味なのだぞ。

そしてこの『ず』は否定形の助動詞のはずだ。

それにも関わらず世間一般の認識は『燃やすべから不』ときている。流行語だ、新語造語だと喚き立てる割には基礎すら成っていないではないか。

それで何を偉そうに。時代についていけないロートルどもが。時は今こうして刻一刻と流れているのだぞ。それなのに——」

「すまん。妹よ。意味が分からん。主旨もずれまくりだ」

「——私としたことが少し熱くなったか。

今日の5時まで2chに蔓延っていたら妙に癪に障る古典派が居てな。

それをいまさつきまで叩きっぱなしにされていて、少々昂ぶっている」

「お前、暇だな」

「暇なモノか。あそこは私の居住区だ。

あそこそが私の真にあるべき場所なのだ。

むしろ今こうしている私など栄養配給装置に過ぎない」

「妹よ……」

「何だ兄よ。何だその可哀想な人を見る眼は。そういった目は私の専売特許だぞ。」

勝手に使いおつてからに。次では会うのは法廷と知れ」

「そうしたら一体この世にどれ程の人が妹によって法廷に召喚されるやら」

「適用者は兄のみだ」

「人種差別反対」

「差別にあらず。これは区別だ」

「よくある言い返しだな」

「喧しい。それより可燃と不燃についてだ」

「どうしてそんな事にそれほどまでに拘る」

「ゴミの分別が面倒だ」

「・・・それだけか？」

「・・・悪いか？」

「・・・お前将来1人で生きていけるのか？」

「ああ、その点は問題ない」

「何故に」

「兄の保険金で行く予定だからだ」

「そろそろ真面目に家出を考えるべきだろうか」

可燃不燃（後書き）

・・・あー、ネタが。
ネタがつまりだした・・・。
更新速度低下の予感ですな。

ペンについてるアレ

「兄よ」

「何だ妹よ。なんだその手のペンは。」

妹よ、何故ペンを持った腕を振り上げているのだ」

「決まっている。振り下ろすためだ」

「その軌道上に俺の頭部がある事を教えておこつ」

「言われるまでもない」

「うおう。また普通に振り下ろしおつて」

「何故兄は何だかんだでいつも避けるのだ？」

「何だかんだつてお前、俺は死にたいなどといったつもりはないが。その如何にも俺が死にたがってるクセに死なないみたいない方はなんだ？」

「家族のために死ぬのは長男の務めだ」

「例えそうだとしても家族の私利私欲のために死ぬのではないな」

「兄よ、長男が遺産目当ての弟・妹に殺されるのは最早人類の定義。昼ドラを初めを例とした最近の人間関係事情における真理のはず」

「なんだ？その微笑みはなんだ？」

殴っていいか？殴ってもいいのか？」

「ふ、愚民がひれ伏せ」

「脈絡も糞もないのに腹立つな。いやないからこそ腹立つな」

「まあ、兄がどうのこうのなど林檎が何故林檎なのかぐらいどうでもいい話だ。

そんな事より、コレを見るのだ。そして私の疑問に答えるのだ」

「分かるようで分かりにくいをたとえだな。

そして何だ妹。今さっき凶器として使用されたペンがどうした」

「この部分の名称は何だ」

「この部分というのは、今お前が摘み上げていて、

胸ポケットなどに入れるとき全部入らないように引っ掛けるその部分か？」

「そのとおりだ」

「……フックじゃないのか」

「………」

「………」

「………凡俗が」

「待て、一体今俺の何処に非があった。

何故そんな冷たく鋭利な目で見られなければならない」

「兄よ。私の前にたたずむアホ面よ」

「本当腹立つな。何でこういふときばかりいい笑顔なのだ？」

「兄よ。私は大多数の意見など求めていないのだ。

欲しいのは刺激、斬新、奇抜、次なるステップなのだよ」

「何処のマッドサイエンティストだ」

「ともかく、ここの名称を考えるのだ。

そもそもフックって何か格好悪い。

一体この世にどれだけのフックがあると思っているのだ。

その中、更にフックを足したらそのうち世界はフックで満たされるぞ」

「フックという三文字にそれだけの征服力があるとは思えんがな」

「いいからさっさと考える。私は暇ではないのだ」

「暇人以外こんな事しないだろという突っ込みはしたら負けだろうか」

「負けだな」

「……さて、それならなにがいいだろうか」

「……ああ、私は一ついい名を思いついた」

「何だ？」

「『兄』だ」

「その心は」

「あつてもなくてもあんま変わらない」

「……落ちとしては綺麗に行ったか……」

ペンについてるアレ（後書き）

さり気にユニークの数が5000越えー。

読んでくださった方々ありがとうございます。

感謝の気持ちを込めてー・・・

込めてー・・・何かできますかねー・・・

あー・・・取り合えず更新がんばります。

こんなんですが、これからもお付き合いいただけると幸いです。

空白（前書き）

。

空白

「兄よ」

「何だ妹」

「久しぶりだな」

「……さてどう反応するか」

「約１ヶ月ぶりくらいか会うのは」

「ああ、お前が全く部屋から出てこなかったからな。

この一ヶ月お前は何かをしていたんだ？部屋から黒煙まで噴出して」

「何を言っているの兄よ。私は今日の朝食時にも居たが。

ついにボケがきたのか。そうなのか。ならば最早身边にいる私としては公害でしかない。

それ相応にさっさと保険に入って死ぬがいい」

「妹よ。色々と言いたいを取り合えず都合というものがある。

そして認めなければいけないものでも、時には目を逸らさなければならないのだ。

そうしなければ崩れていくモノというのも世界にはあるのだ。いや、むしろそういったモノが世界なのだ」

「熱弁したところで所詮言い訳だな」

「……まさか貴様全て分かった上でか」

「無論」

「そうやってほつれていく世界を見て楽しいか魔王」

「誰が魔王だ愚兄」

「お前ほど魔王という呼び方が合う奴もそうはいないな」

「どういう意味か聞くだけ聞いてやる。
いうだけ言ったら齒を食いしばれ。

大丈夫だ痛みはない。感じる暇もなくその首とばしてやる」

「また日本刀か。しかも二本」

「日本だけにな」

「……」

「……」

「妹」

「仕方ないのだ。いまいち勝手が分からなくなったのだ。
空いてしまった空白を埋めるのは難しいのだ」

「今のは言いたくても言っではいけないところだったな」

「……チッ」

「だから照れ隠しに刃物を振り下ろすな。
そんな事でいちいちデッドオアアライブを彷徨う俺の気持ちにもな
れ」

「蛆虫の気持ちを理解しようと勤める人間はいない」

「分かった分かった。今は流してやる。だからその武器を下ろせ」

「分かった」

「……誰が俺の頭の上に振り下ろせといった」

「何だ兄、ついに死にたくなつたのかと思つた」

「死ね死ねとお前人の命はそんなに軽くないのだぞ」

「今更だな」

「今からでも遅くない。俺は決めたのだ。」

妹よ、お前を今年中に脱二トさせてみせる。

そうしなければ死んだクソツタレな両親に顔向けできん」

「不可能だ。ついでに私たちの両親は健在だろうが」

「最早顔も思い出せんほど家に居ない親など死んだも同然。
仕送りもいつの間にか止まっているしな。

面倒もみない、養育費も出さない。何が親なモノか。

放任主義？片腹痛い。無責任も上手くいったものだな。

俺は断固として奴らの生存を認めない」

「そうか」

「妹よ。すぐそうやって兄の熱弁を切り捨てるのはどうかと思う。せつかくつながりそうな話をそうやって無碍にしてはいけないと思う」

「私にとっての親も兄も金づるでしかないからな。」

兄か親、どちらか一方が馬馬車の如く働かせつせと私に金を配給すればすべて無問題。

逆説的にどちらか一方の行動など蟻の巣作り程どうでもいい」

「家出する。探してくれるな」

「一向に構わんが生活費は置いていけ」

「……せつない」

空白（後書き）

どうもすいません。遅れまくりました。

サボり癖がついちゃっていけませんね。

サボって話しの雰囲気忘れちゃって、

それを思い出すまで駆けなくて、そしてまたサボって。

終わらない悪循環。

次からはあまり期間をおかないようにしたいです

さとう

「兄よ。バレンタインデーだ」

「何時の話だ」

「2月14日」

「普通に反されても困る。ちなみに今日は何日か知っているか」

「3月序盤」

「さて、どれほど前の話やら」

「喧しい。四の五の言わずに食うがいい。
私がわざわざ作ってやった猪口冷糖だ」

「何故当て字。まあ、嬉しいといえば嬉しいので頂……かない事にする」

「何故だ。私の丹念込めた気持ち満載のコレを食わないとは世界への宣戦布告だぞ」

「妹よ。チョコレートがどういったものか知っているか」

「カカオマスに砂糖、カカオバターを混ぜて練り固めた食品」

「まるでwikiで調べたような回答ありがとう。」

では俺の手の中にある何故か小さなうめき声が聞こえる物体Xはな

んだ」

「チョコレートだ」

「言い切った。しかも自信満面。」

どうみてもコレチョコじゃないだろ。そもそも食い物じゃないだろ」

「馬鹿を言っな。市販のチョコを溶かして型に流したただけだぞ」

「じゃあ何故うめき声が？しかもコレ人間のものじゃないか？心なしか隣の家の佐藤さんのような……」

「砂糖も佐藤も一緒だろ」

「妹よ。さとう違いだ」

「これだから日本語はややこしくていけない」

「とういつか佐藤さんか。佐藤さんを入れたのか」

「兄よ貴様は馬鹿か。人間をチョコに混ぜる奴が何処に居る」

「妹よ。何故俺の眼を見て話さない。」

「そういえば一昨日からやけに隣の家が静かなのだが」

「……チッ」

「妹よ、佐藤さんに何をした。」

「事と場合によつては自首してこい。大丈夫だ刑務所だって飯は食えるぞ。」

それにお前のような頭のネジが足りないお友達もいっぱいだ」

「誰が犯罪者だ。大丈夫だ。バレなければ罪ではない」

「本気か。本気で佐藤さん混ぜたのか」

「ハッ、兄はつくづく低脳だな。

このくらいの冗談でうるたえよってそんなわけ……ないだろう」

「何その間。何なんだよその間」

「いいから食え」

「嫌だ。

とういうかお前の事だから佐藤さんじゃなくても下剤くらい入って
そうだ」

「そんなもん入れてない。本当だぞ」

「……本当か」

「本当だ」

「本当に本当か」

「くだい。兄よだから彼女が出来ないのだ。粘着質の男は女性に嫌
われるらしいぞ」

「やかましい。本当に入っていないんだな」

「本当だ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……いや、待て。そういえば佐藤さんどうなった」

「惜しかった」

さとう（後書き）

佐藤さんの行方はご想像にお任せします。

にしてもネタが出てこない。

苦肉の策で好きじゃないのだが行事ネタ。
多分次の話は雛祭りなんじゃないかと。

ぶていんぐ（前書き）

何時の間にやらアクセス数も1万越え。

感謝感激雨霰。取り合えずこの感動を猫に伝えて来たいと思います。これからもこんなですが見捨てずにお付き合い頂けたら嬉しいです。

読者の方々に感謝を。

ぶていんぐ

「兄よ。これがどういうことか説明しろ」

「藪から棒なのはいつもの事として、何事だ妹」

「これが何だか行ってみる愚兄」

「プリンの空容器だな愚妹」

「そうだ。昨晚私が深夜わざわざコンビニという秘境まで足を伸ばし、

決死の覚悟でレジという地獄の一種を踏破した末の戦利品だったモノだ」

「コンビニが秘境って。歩いて2分もかからんだろ」

「玄関から先は異世界同然」

「どんだけお前の世界狭いんだ。庭もアウトか」

「外気に触れる時点で考えられない」

「部屋の換気もできんではないか。引きこもりもここまで来ると凄いな」

「誰が引きこもりだ。何度も言うが私は自宅警備員だ」

「少し立派に形容してもみても本質は変わらんぞ」

「何だ兄のくせに。そんな慈悲に満ちた目で見るな気色悪い」

「さらりと傷つくぞ」

「兄よ、傷は男の勲章だそうだぞ」

「心の傷は別だと思うのだが」

「しかし背中への傷は剣士の恥らしいな。全く理解しがたい。傷は傷であって所詮は肉体の欠落でしかないと思うのだが」

「やめておけ妹。その辺は触れちゃいけない男子の深層心理における神秘だ。」

「追求しても、ましてや解き明かそうなどとは考えちゃいけないものだ」

「そうか」

「嫌にあっさりだな」

「いや、多少の興味が瞬間的に沸いたが、

結局、Y染色体保有種の固有概念など知っても一銭の価値もない」

「ああ、そうかい」

「どうした兄よ。そんな疲れきった間抜け面をして。

そのまま洗面所にいって鏡で自分の顔を見るといいぞ。

百人が百人、整形か自殺を考える。ちなみに私は自殺がお勧めだ」

「五月蠅い余計なお世話だ。」

それとさつさとそのプリン容器捨てて来いよ。何か臭いぞ」

「む、またいつの間にか話がずれてたか。これだから兄との会話は面倒だ。」

ともあれ兄よ、このプリンの落とし前はつけて貰うぞ」

「落とし前って何の話だ」

「とぼけているつもりか。それでは唯のアホにしかみえんぞ。」

私のプリンを勝手に食った罪は万死に値するが、特別一死で勘弁してやる」

「俺じゃないぞ」

「じゃあ誰だというのだ。この家に貴様と私以外に人がいるとでも言うのか」

「猫がいる」

「兄よ、猫がカスタードプディングを食うかボケナスが」

「食うんじゃないか」

「兄よ、いい年こいて夢を見るな」

「いや、だってお前が喚いている間にもプリンの二つ目に猫の手が」

「なっ」

「愚妹が。そんなわけあるか？ つつの。サラバだ」

「ななっ」

「今回は俺の勝ちだな愚妹よー」

ぶていんぐ（後書き）

Y染色体保有種Ⅱ 男性のはず

え？ ひな祭りのはなし？ A H A H A H A H A !

こんな行き当たりばったりの話にそんな計画性あるわけじゃないですか。

その時あったネタを使うのが当然。その場しのぎは常套句。こんな作者でスンマセン。

卵焼き

「兄よ。何だコレは」

「何だ妹。世間知らずだとは思っていたがそこまでなのか？」

これは卵焼きといって卵を溶いてお好みで味付けしフライパンで焼いた食べ物だ」

「それくらい知っている。馬鹿にしているのか」

「まさに」

「猫アタック」

「猫キャッチ。食事中にモノを投げるな」

「論点はそこなのか。やはり兄も頭のネジが足りてないな」

「兄も、という事はお前も一応変である自覚あったのだな」

「揚げ足を取るな」

「箸を投げるな。目に刺さったらどうする」

「むしろ目を貫い——だ」

「なにやら重要な部分が聞こえないのだが」

「食事中には不適なモノだったため私の本能がシェルターをかけた

様だ」

「妹よ。お前は変なところで随分と高性能だな」

「その点兄はつくづく低性能だな。初期のMacの方がまだいい働きするんじゃないか。

この卵焼きも全然ダメだしな。家事能力が唯一のとりえなのにも関わらずこれではな。

そろそろ買い替え時だろうか」

「買い替え時つて。何処の世に兄を売ってくれる店があるんだ」

「知らんのか？今は探せばネットでも兄が見つかるんだぞ」

「……嫌な予感がするな。それは出会い系か？」

「そうだが」

「やめとけ」

「何故」

「大人になつたら分かる」

「要するに下心満載の男ばかりだからか」

「……妹よ、知ってて聞いたか」

「フハハ。私の知識は縦横無尽」

「腹立つー。なんか腹立つー。」

妹を絞め殺していい免罪符って何処で売ってるんだろっな」

「ふん。卵焼きもまともに作れん無能者が私にたてつこっなど永久に早い」

「お前なんかカップラーメンしか作れないくせによく言う」

「私は他に特化しているからいいのだ。」

人間一長一短、悪いところもある意味ステータスとなる時代だと前にも言わなかったか。

その点兄は家事ばかりのくせに、家事もまともにできないだろうが」

「出来てるだろうが」

「ならばなんだこの卵焼きは」

「何処からどうみても美味しそうだろう」

「馬鹿か貴様は」

「意味が分からん」

「ふん、ならば兄よ、その耳かっぴじって良く聞くが良い。」

卵焼きの真の姿は外側ふんわり内側トロトロなのだ。

それが本来のあるべき姿にして唯一無二の究極形。

人間が人間にしてより高みへと近づく至高の姿なのだ」

「付き合ってられん」

「待てコラ。貴様何私の卵焼きにまで箸を伸ばしている」

「食わんのだろ？」

「何時誰が食わないなどと言った。難聴かむしろ幻聴か」

「妹よ、見苦しいな」

「ふん、いいのかそんな事を言つて。兄よ」

「だから意味が分からん。お前の台詞はいちいち難解だ」

「このまま行くな」

「行くとなんだ」

「微妙なテンポがオチになってしまつぞ」

「・・・」

「・・・」

「ダメなのか？」

「・・・別にいいか」

卵焼き（後書き）

ダメだった。
次に期待。

俺俺詐欺

「おい、愚兄」

「んー、って起き掛けに日本刀。お久しぶり。そして振り下ろすな」

「電話だ」

「日本刀についてのコメントはなしか」

「もうなれただろう」

「……確かに。でも人として何か大事なものをなくした気分だ」

「いいから電話だ。私には何を言っているか分からん」

「なんだ外人さんか？」

「そんなわけ無かるう。私が五ヶ国語風情、話せぬわけがない」

「軽く嫌味だな。そして何故それだけの能力がありながら引きこもる。」

「英語が出来るだけで羨望のまなざしを集められる世の中だというのに」

「兄よ。蛆虫に見つめられて喜ぶやつがこの世に居ると思うのか？」

「流石だな魔王」

「誰が魔王」

「じゃあム。力とかがお好みか？」

「そこに直れ。忌々しい口ごと首を刎ねてやる。

何不安がる事はない。私は刃の扱いに長けているわけではないから一発では無理だろうが、その首が飛ぶまで何度でも何度でも斬りつけてやる所存だ」

「分った。まず日本刀をおけ。そして受話器を渡して三步下がってカバンに中学二年の英語国語数学理科社会の教科書をつめて学校へ行け」

「さりげなく学校をいくことを要求しても無駄だ」

「妹よ。じゃあせめて前半二つくらいやってくれてもよくない？」

「私の座右の銘は『0か100』だ」

「ほう、ならばお前の残したプリンは食べても良いと」

「妹の食べ残しがそこまで魅力的か。変態だな愚兄」

「妹よ、その切り替えしはお前の想像を絶する程人の心を抉る」

「知った事か」

「もういい、せめてその受話器だけでも明け渡せ」

「む、そういえばそうだった。さっきからチャラリラ五月蠅いと思

「つたらこれの保留音か」

「気づけ、というより忘れるな」

「兄がいちいち話を逸らすからだろうがボケナス」

「日本刀の先制攻撃を加えてきた妹の不条理が隠せない俺が居る。はいもしもし」

『俺俺！ 俺だけどさ！ 今そこで人引いちやつてに300万程いるらしくて！』

「……成るほど。妹よ、確かにこれは意味がわからんな」

「だろう」

『今から言う口座に振り込んでいてくれないか！？』

「まあ、なんか妹適当に言っただけ」

「む、分った」

『——だから！ つて聞いてた！？ 口座番号は』

「おい」

『——あ？』

「私が神だ」

『え——ガチャン——ツーツー』

俺俺詐欺（後書き）

スランプ入ってた。

今もまだひきずってて出来が悪い。

雰囲気もちよっと忘れ気味だったし。

次頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3731d/>

兄と妹えぶりでい

2010年10月10日01時59分発行